

2017 年度第 1 回鳥居・井上基金助成実施報告 TIE-01

氏名：遠藤美朗（東京工業大学 理学院地球惑星科学系）

課題：日本地球化学若手シンポジウム 2017

期間：2017 年 9 月 15-16 日

本文：

日本地球化学会「鳥居・井上基金」の助成を受けて、日本地球化学若手シンポジウム 2017 を開催しましたので報告します。今年度は神奈川県三浦市にある研修施設のマホロバ・マインズ三浦にて、地球化学会年会後の 9 月 15 日（金）～16 日（土）の日程で行いました。当初は 9 月 15 日（金）～17 日（日）の 2 泊を予定しておりましたが、関東近辺での宿泊施設の確保が困難であったため 1 泊に変更しました。しかし結果的に参加者にとってスケジュールを確保しやすかったこともあり、学部生から助教の幅広い世代と、岩石、水、大気、生物、隕石といった複数の分野にわたる、計 31 名、講師 2 名の総勢 33 名の多くの参加者に恵まれました。

参加者同士でのポスター発表では、分野や学年を越えて議論を行いました。とくに分野の異なる学生同士でも、同じ化合物や元素を対象とした分析という共通点をきっかけに、お互いにどんどん質問を投げかけあっている姿が印象的でした。これは地球化学分野ならではの議論活発化の方法であり、地球の異なるフィールドへの知見や思考の幅を広げるのに効果的な機会を提供できたのではないかと思います。

招待講演では、東京大学大気海洋研究所の横山祐典先生と九州大学惑星微量有機化合物研究センターの橋口未奈子先生にお越しいただきました。横山先生には、日本の大学を卒業後、海外（オーストラリア）の大学院に進学し学位をとりその後もオーストラリアやアメリカでポスドクを過ごされたという特異な経歴に基づいて、人との出会いの大切さや、チャレンジする姿勢、ポジティブな人生観を語っていただきました。ご講演の中で、「もし、海外での 2 年間のポストと、日本での 5 年間のポストを提示されたら、どちらを選択するか？」という質問に対し、参加者の半数以上が海外を選択すると回答しており、横山先生のお話に多くの方が奮い立たされた様子でした。橋口先生には、地球外有機物というホットなトピックを研究されている若手研究員として、自身の経験と、これまでの研究内容についてご講演いただきました。同じ講演を聞いた中でも参加者によって、隕石という分析対象、太陽系の起源ならびに生命の起源に関係するテーマ、最先端の分析手法など、着目した観点は様々でしたが、それぞれに興味を持って楽しくお話を聞かせていただきました。また、橋口先生が博士取得前も後も、常に新しい分析手法に挑戦することで地球外有機物への理解を深めていらっしゃるという研究展開は、とくに博士課程の学生にとって、研

究者として生きていく上での一つのロールモデルとして映ったのではないかと
思います。両講演とも、参加者にとって、今後の研究や進路を考える上で大変
参考になるお話でした。

また、残念ながら天候に恵まれませんでした。東工大の学生に案内してもらいながら、城ヶ島にて地質の巡検を行いました。城ヶ島では堆積岩のきれいな地層が見られます。特に、地層の上下判定に使える構造や生物の動いた痕跡があり、またテクトニックの点においても大きな褶曲構造や多数の断層があります。化学系の分野から地球化学の研究室に所属した学生には地層を見たりその意味を考える経験は少ないので、フィールドに行くことにより、空間的にも時間的にもスケールの大きな地球を感じることができました。地質に近い研究をされている方からは、特徴的な構造が見られる成因に関する鋭い質問が出るなど、活気のある巡検になりました。普段、分析をメインに行っている私からすると、地球科学、地球化学はフィールドがベースにある学問であり、時々フィールドに出ることを忘れてはいけないと再確認しました。

シンポジウム開催にあたり、運営にご協力してくださった皆様、お忙しい中、ご講演を引き受けてくださり素晴らしいご講演をしてくださった横山祐典先生、橋口未奈子先生、そして参加者の皆様のおかげでシンポジウムを実施することができました。日本地球化学会の鳥居・井上基金を主に遠方からの学生の交通費の援助に使わせていただきました。皆様のご協力があってシンポジウムが開催できましたことを、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



集合写真①：神奈川県三浦市 マホロバ・マインズ三浦会議室にて



集合写真②：神奈川県三浦市城ヶ島にて 火炎構造が見られる特徴的な地層を背景に